

県立図書館だより

平成28年10月

青森県立図書館報 第26号

戦後の日本を二分したふたり

エクステンド常設展示

石坂洋次郎と太宰治

平成28年6月3日[金]～11月23日[水]
第4(9月は第5)木曜休館

無言だったんだよね、みんな。終戦直後、しばらくの間は。(内田樹)

そうそう(中略)で、1947年、2年くらい経ってから、『斜陽』(太宰治)と『青い山脈』(石坂洋次郎)で、やっとならぶようになった。「あ、そうか! 書かなきゃ!」って。(高橋源一郎)

青森県近代文学館(青森市荒川字藤戸119-7) TEL017-739-2575

エクステンド常設展示 「石坂洋次郎と太宰治」

青森県近代文学館で開催中のエクステンド常設展示「石坂洋次郎と太宰治」は11月23日(水)までの開催です。

戦後、「朝日新聞」最初の新聞小説となったのは石坂洋次郎の「青い山脈」。この作品は明るい男女交際のあり方や民主主義がテーマとなっており、まさに戦後の幕開けとして広く国民の支持を得ました。全部で5回映画化させたことに加え、テレビやラジオの番組にもなります。洋次郎は今年没後30年。本展では青い山脈の初版本の他、映画「石中先生行状記」弘前ロケを行った際の資料(宮田重藏・三

船敏郎・杉葉子・池部良らのサイン色紙等)や旧制弘前中学時代の校友会誌等を展示しています。

一方、戦後間もない1945年9月に『惜別』を刊行し、翌月「河北新報」と「東奥日報」で「パンドラの匣」を連載するなど、次々に作品を発表し続けた太宰治。生家の没落の様子等をモデルにし、後に太宰の子を産む、太田静子の日記を参考にした小説『斜陽』がベストセラーとなり、「斜陽族」が流行語となるなど流行作家となりましたが、間もなく玉川上水で亡くなります。

戦後日本文学の人気を二分した「陽」の石坂洋次郎と「陰」の太宰治の展示。お見逃しなく。

目次

エクステンド常設展示「石坂洋次郎と太宰治」	1
協力館が増えました	2
長期休館のお知らせ	2
こんなレファレンスがありました	3～4
こどものひろば	5
ご存じですか?この資料	6
ようこそ文学館へ!	7
カウンターからひとこと	8

協力館が増えました

県立図書館では、県内の市町村立図書館や公民館等との連携・協力を行なっています。

平成 28 年 7 月 29 日に**つがる市立図書館が開館し、協力館に加わりました。**これにより、つがる市立図書館でも、オンライン貸出サービスによる県立図書館の本の受取・返却や、遠隔地返却サービスによる県立図書館の本の返却が可能となりましたので、積極的にご利用ください。

長期休館のお知らせ

県立図書館と県近代文学館は、図書館コンピュータシステム更新のため、**平成 28 年 11 月 24 日(木)から 12 月 21 日(水)まで休館**します。休館中は、レファレンスサービスやオンライン貸出サービスも休止します。返却はブックポストをご利用ください。

利用者みなさまにはご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

11 月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

システム更新のため休館

12 月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

年末年始のため休館

返却用ブックポストのご案内



▲県立図書館正面玄関脇(青森市荒川)のブックポスト



▲県庁舎北棟西側歩道脇(青森市新町)のブックポスト

～ こんなレファレンスがありました ～

【第23回】

故郷（ふるさと）の話題読み語り 「煙の向こうに…！空飛ぶ円盤を見ていた？」



青森県では現在、“短命県返上”のために様々な取り組みを行っています。
当館でも、喫煙場所を撤去し、8月26日より館内全面禁煙としました。
趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

タバコについては以前、「健康に悪いタバコが載った本を、なぜ児童室に置くのか、撤去しないのか。」というご意見を利用者の方からいただいたことがあります。

昔の暮らしを紹介した本、落語、小説などにも煙草はでてきます。図書館では、歴史や文化の一片を消し去ってしまうことはできません。

煙草と健康の問題とともに、昔の暮らしや、扇子1本で煙管や箸を表現する伝統話芸などについて、子どもたちに伝えていただければと思います。

さて、枕が長くなってしまいましたが、今回はこの「タバコ」の話です。

【質 問】

北村小松が「タバコ」について書いた随筆などありませんか？
どのようなことを書いたものがありますか？

北村小松は、八戸市出身の脚本、SF小説の作家です。

青森県を代表する13人の作家の一人として、当館併設（2階）の「青森県近代文学館」では常設で展示しています。



愛煙家として知られ、常設展示の写真（左写真）も、缶 Peace（ピース）をテーブルに、銜えタバコ姿です。

さて随筆ですが、『たばこ随想』（博報堂ラジオ CM ルーム編 日本専売公社東京地方局販売促進課発行 1964）に8つの短文が掲載されています。

この本は、1963（昭和38）年から1964（昭和39）年にかけて、TBSのラジオ番組「朝の旅情」に挿入されたCM集です。「たばこ随想」という名称とCMらしからぬ企画・内容に、ACC（全日本CM協議会）の企画賞を受賞しています。2編、紹介しましょう。

（内容は一部抽出、筆者要約のうえ紹介）

「先輩の影響」…小松が、原稿料が入るとスリーキャッスル（タバコの銘柄）の50本入缶を買うようになったのは、直木三十五が、その缶をわしづかみに銀座を歩いていたというイメージからであり、着物や洋服に吸殻で穴をつくるのは、先輩 菊池寛が同様であったことの影響だと書いています。

先輩を盾にするとはい、言い訳がましい気もしますが、故人です、お許しください。

もう1つ、SF作家らしい内容のものを

「宇宙たばこ」…宇宙人についての本や報告書はあるが、煙草がでてこない。「宇宙旅行用煙草」を発明したら…と、はじまり、アメリカの有人飛行計画（マーキュリー計画）に話が及びます。アメリカが初めて有人で地球周回に成功したフレンドシップ7のカプセルを見た際に、とても狭く、多数の計器に注意しながら一服とはいかない、

無煙無臭の煙草でなければならぬと続けています。

小松はさらに、その宇宙飛行士に強引に会ったが、煙草を吸っていたか、好きか質問できなかったことが一寸残念と記しています。

「強引に」というのは一体全体どう状況だったのか知ることはできませんが、後に、三島由紀夫が、小松への追悼文のなかで

「～ 氏の内の決して朽ちない少年のころ、あらゆる新奇なものの神秘的なものの宇宙的なものへの関心は、そのナイーブな、けがれの無い情熱は、世俗にまみれた私の心を洗った。～」

(「空飛ぶ円盤と人間通—北村小松氏のこと」初出：朝日新聞(夕刊)昭和39年4月30日)と表現した「少年のころ」「けがれの無い情熱」が可能にしたのではないのでしょうか。

さて、その宇宙飛行士は、グレン中佐。皆さん、ご記憶にありませんか。1998(平成10)年、77歳にして、スペースシャトルのディスカバリー号で、日本人の向井千秋さんらと再び宇宙へ行ったジョン・グレン上院議員(右写真：後列右端)その人です。

北村小松は1964(昭和39)年4月に亡くなっていますが、生きていれば97歳、きっと、グレン上院議員に「煙草は吸わないのか?」「宇宙船は広くなったし、吸えるのではないか。」と、質問に行きたかったことでしょう。



三島由紀夫の追悼文を紹介しましたが、三島が小松と親しくなったのは、「空飛ぶ円盤」を通じてでした。

小松は、小学校時代から飛行機や空にあこがれ、戦前から航空小説を書き、また、堪能な語学を生かして欧米の様々な資料を収集し、科学の知識も豊富でした。そして、マンテル大尉事件を駐留米軍放送で聞いて興味を持ち、空飛ぶ円盤の研究をはじめたといえます。(※ マンテル大尉事件：1948(昭和23)年1月8日(現地時間1月7日午後)に、アメリカ・ケンタッキー州でのUFO目撃と、それにより起こった空軍機の墜落事件)

そして、昭和25年には、小学館『小学三年生』に「空とぶ円ばん」を連載、その後も小説やエッセイ、ドラマ原作などで数多く空飛ぶ円盤を登場させていたため「日本空飛ぶ円盤研究会」設立に協力を求められ、参加します。この会には、石原慎太郎、糸川英夫・星新一・黛敏郎ら著名人も多数加わっていました。三島もその一人だったのです。

三島は小松と二人で空飛ぶ円盤の観測をしたことを書いています。

「「空飛ぶ円盤」の観測に失敗して—私の本「美しい星」」(初出：読売新聞・昭和39年1月19日)と題したもので、幾度とない小松との空飛ぶ円盤観測、そしてどんなに努力しても現れない円盤、それが小説の切掛けとなったことが書かれています。この「美しい星」を原作とした映画が、来年の春には公開されるそうです。



三島との空飛ぶ円盤観測、小松はその時も銜えタバコだったに違いありません。ひょっとすると、煙の向こうに、三島には見えなくても空飛ぶ円盤を見ていたかも知れません。子どものような目で、三島をチラリと見ながら。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757
電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

こどものひろば



「おしえて先生！知るしるする探検隊」で探検しちゃおう！

4月の第四土曜日から、「おしえて先生！知るしるする探検隊」が始まりました。参加してくれた子供たちは、みんな「知るしるする探検隊」の探検隊員。毎月、いろいろな世界の隊長がやってきて、子供たちと一緒に、不思議な科学の世界、楽しい運動の世界、身近なお仕事の世界を探検します。

4月は、野呂隊長と一緒に、「どっちが速く転がる？」というテーマで、科学の世界を探検しました。初めて参加してくれた隊員の間も、「ころがる」世界に興味津々。隊長と一緒に、「ものがころがる速さは・・・〇〇で決まるんだ！」という秘密を発見！今までどんな探検をしたかは、県立図書館「こどものへや」のHPで紹介しています。見てくださいね。

音のひみつの世界や、かけっこの達人になれちゃう世界、そして、元気になれる体操の世界……。そうそう、図書館がある荒川地区からも隊長が来てくれま



4月の探検隊を指揮してくださった野呂隊長。探検帽がお似合いです！

した。7月は荒川郵便局の三橋隊長が、ポストから皆さんの家までの「てがみ」の世界を、9月には青森刑務所の大嶋隊長が、日本古来の武道、「剣道」の世界を案内してくれましたよ。他の隊長も、隊員の皆さんと、楽しい世界を探検してくれる予定です。探検のチャンスは見逃せませんよ！

次は、どんな素敵なわくわくする世界を探検できるのかな？「知るしるする探検隊」は、いつでも新隊員を募集中。毎月第4土曜日午後2時は、児童閲覧室おはなしコーナーに集合だ！



「おしえて先生！知るしるする探検隊」

- 探検する日：11・12・3月を除く毎月第4土曜日
- 集合時間：午後2時～2時30分
- 集合場所：児童閲覧室おはなしコーナー
- 内容：科学の実験やいろんなお仕事のはなし、スポーツの体験、本の展示など



隊員証だよ

みんなも一緒に探検しよう！



今年は、沢田教一氏の生誕 80 周年にあたります。

沢田氏といえば、ベトナム戦争の生々しい現実を克明に写し出し、ジャーナリストにとっての最高峰の国際的権威たるピューリツァー賞を受賞した写真家として、世界的に知られています。

今回はそんな沢田氏の活動の記録を記した資料をご紹介します。

『戦場カメラマン 沢田教一の眼』（斉藤光政編 山川出版社 2015）

1966 年度ピューリツァー賞他を受賞した「安全への逃避」をはじめとした数々の写真が掲載されています。それらの写真には、泥沼の戦争とも称されたベトナム戦争を象徴するかのような重苦しいものが多く含まれます。緊張した面持ちの米兵や家族を失ったベトナム人の母親の姿には、思わず言葉を失います。

一方で、何気ない日常の 1 コマを切り取ったような写真も見受けられます。特に、厳しい現実の中にあっても明るく振る舞う子どもたちの姿には、学ぶべきものがあります。

他方で、岩木山や弘前城、奥入瀬溪流などの、私たちにとって馴染み深い風景を捉えた写真もあります。普段見慣れた光景でも、レンズ越しの姿はいつもと違う味わいを持っています。

写真の他にも、沢田氏の人柄について触れている記述があります。沢田氏は「忍耐強い津軽人の気質そのままに、口数が少なく、感情をあらわにすることが少なかった」（355 ページ）。そのためか、ピューリツァー賞受賞の知らせを聞いた時でさえ、いつもと変わらない様子であったといえます。そのような気質が偉業を成し遂げる要因の一つであったのかもしれません。

この他、当館では『戦場』（沢田教一著 毎日新聞社 1971）、やDVD『サワダ』（五十嵐匠監督 グループ現代 2006）など、沢田氏に関する資料を所蔵しております。

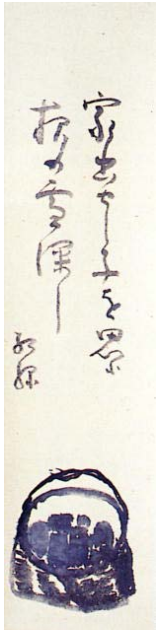
なお、10 月 8 日から県立美術館で沢田氏の生誕 80 周年記念展示が行われるに際し、一般閲覧室青森県立美術館情報コーナーで沢田氏に関わる資料を排架しておりますので、是非、ご利用ください。

青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様に広くご利用いただいております。

ようこそ文学館へ！

近代文学館資料の紹介(第25回)

好評のうちに3回を数えたエクステンド常設展示。第4弾となる「佐藤紅緑^{こうろく}と福士幸次郎^{こうじろう}」(本年12月23日から開催)では以下のような資料を紹介します。



佐藤紅緑俳画幅「家出せし子を思ふ夜の雪深し」

佐藤紅緑(1874～1949)は弘前の親方町で生まれ、明治26年に青森県尋常中学校を中退。上京し日本新聞社の社主である同郷人、陸羯南^{くがかつなん}の書生となりました。翌年には日本新聞社に入社し、ここで正岡子規と出会います。紅緑という号は、実は本名である^{こうろく} 洽六をもじって子規が付けてくれたものでした。

その後、紅緑は多くの新聞社を転々としませんが、明治36年には後に童謡詩人サトウ・ハチローとなる長男の八郎が誕生。相当な腕白者であり、大正6年には紅緑から勘当されたこともあるそうです。そんな八郎に同行し支えたのは、紅緑の書生だった福士幸次郎でした。詠まれた時期こそ未詳ですが、当館蔵の俳画幅には、紅緑が八郎を思って詠んだと見られる句が記されています。

福士幸次郎草稿「田舎のモノローグ」

弘前市出身の詩人福士幸次郎(1889～1946)は「詩神」昭和3年9月号に「田舎のモノローグ」という文章を寄せています。当館で所蔵している同名の草稿の冒頭には次のような一文が見られます。

郷里の津軽地方で四年のあひだ暮して、この沈黙の業の課程のあひだに、わたくしの知ることのできた獲得物の一つは、空といふものが今まで思ふてゐた以上にずっと広いといふことであつた。



口語自由詩の先駆者として世に知られた幸次郎でしたが、大正12年9月に関東大震災に遭遇し、同年冬に帰郷。昭和2年夏に再上京するまでの間を板柳町や新和村(現弘前市)、青森市で過ごしたのです。国語の講師として招かれた東奥義塾では^{こんかんいち} 今官一らを指導し、主筆として迎えられた青森日報社では高木恭造に方言で詩を書くきっかけを与えました。多くの後進を育てた幸次郎の、帰郷中の暮らし振りを垣間見ることができる草稿です。

カウンターからひとこと(第25回)



今回は、「**新聞の保存と提供方法**」についてお話します。

どんな保存方法があるの？

県立図書館では、約 30 紙の新聞を受け入れており、直近 2 ヶ月程度のものは、一般閲覧室内でご覧いただけますが、ある程度年月を経過すると、新聞は様々な形に姿を変えて保存され、皆様に活用されています。

県立図書館の新聞の保存と提供方法には以下のものがあります。

① 「製本」して保存

陸奥新報などは、半月～1 ヶ月を製本したうえで保存しています。
ご利用の際は、カウンターへお尋ねください。

② 「縮刷版」で保存

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞などは、紙面を A 4 版程度に縮小し、1 ヶ月分を 1 冊にまとめた縮刷版を書庫で保存しています。

また、平成 17 年 10 月 1 日以降の東奥日報の紙面は、C D - R O M の縮刷版を館内の専用端末でご覧いただけます。

③ 「マイクロフィルム」で保存

東奥日報、デーリー東北などは、マイクロフィルムという写真フィルムに紙面を撮影して保存しています。

マイクロフィルムは、原紙よりもコンパクトに保存することができ、耐用年数は、100 年を超えるとも言われています。

館内に設置している専用機器を使用してご覧いただけます。

▼書庫内新聞保管風景



▼縮刷版の新聞



▼マイクロフィルム



新聞は、明治時代から保存しているものもあります（一部欠号あり）。

ご自身や家族が生まれた日などの出来事を調べてみませんか？